

曾下瓊鉞初試雪
一痕明月茅渟里
提劍膳臣尋虎跡
盆梅剪盡能留客
紛紛五節舞容閑
幾片落花滋賀山
捲簾清氏封龍顏
濟得隆冬無限艱

容奇（新井白石）

曾て瓊鉞を下して初めて雪を試む

紛々たる五節舞容閑なり

一痕の明月茅渟の里

幾片の落花滋賀の山

劍を提げて膳臣虎跡を尋ね

簾を捲いて清氏竜顔に對す

盆梅剪り尽して能く客を留め

濟い得たり隆冬無限の艱

解説 容奇は雪を表わす。白石が某宅の主人にこの文字を示され、即興に作ったものといわれる。白石は、もともと歴史の造詣が深い。この詩でも、歴史上の故事を引用して、雪の日の感慨を詠じている

語釈 ※曾Ⅱかつて。 ※瓊鉞Ⅱ天地創造説話によると、まだ雨も雪もなかった時、夫婦神の持たれる矛によつてそれが初めて作られたという古事の引用。 ※試雪Ⅱ初めて雪を作ったの意。 ※紛紛Ⅱ雪が霏々として降るさま。 ※五節Ⅱ朝廷の公事。 ※舞容Ⅱ舞う姿、様子。 ※閑Ⅱやびやか、うるわしいさま。 ※一痕Ⅱきずあと。物があつた後に残つたしるし。 ※茅渟里Ⅱ和泉の国の南部の地方。 ※滋賀山Ⅱ天智天皇の時代、わずかに六年ではあつたが、都があつた。 ※膳臣Ⅱ諸国の膳部を管轄して天皇の食膳に奉仕した氏族。膳巴提便は子が虎に食われた時、虎の窟に入り、虎の舌を執つて刺し殺し、皮を剥いで帰つたという故事。

※捲簾Ⅱ清少納言が雪の朝、中宮に香炉峰の雪はいかにと問われ、白樂天の詩句にちなみ、直ちに簾を捲いて、外の雪をお見せしたという史実をいつている。 ※清氏Ⅱ清少納言。 ※竜顔Ⅱ天子の御顔のこと。 ※盆梅剪りⅡ入道時頼が出家後密かに諸国を遍歴して治政民情を觀察して歩いた折り、雪の日たまたま佐野常世の居宅を訪れ、一夜を乞うに、貧しさゆえ薪にもこと欠く有様であつたが、鉢植えの松と竹と梅を焚いてもてなしたという史実の引用。

通釈 地上に降る雪は、曾てわが国の国土誕生の昔、草木等と同じに作られた物で、朝廷の公事の常寧殿、清涼殿に舞姫が舞う様子は、雪が乱れ散る様に似て雅やかである。一片の明月が茅渟の里の海岸を照らす時、白砂は雪のように美しく、滋賀の山に桜の花が散るさまは、雪が美しく降りしきる風情である。百済に使い、その地で我が子を虎に食われた膳臣巴堤便は雪の中、虎の足跡を尋ね、その岩窟に入って虎を殺し、我が子の仇を取つたという。「香炉峰の雪はいかに」と問われ、清少納言は、すぐに簾を捲き上げたのは清少納言の日頃の学殖の深さを示すものとして忘れがたい。また北条時頼が出家姿で諸国を遊歴し、佐野常世の家に一夜の宿りを乞うた時、常世が貧しい中にも快く泊め、大事な鉢植えの梅を惜し気もなく焚いてもてなし、時頼の嚴寒の苦勞を救つたというのも、雪に纏わる美しい話である。